かまどのめし初稿

20240331

エリー

目次

1、カエデ誕生 1
2、連想 2
3、関係ある？ 5
4、ひとりで挑戦！ 7
5、本音 9
6、ハガネ 12
7、科学の力 14
8、再戦 15
9-1、卒寮 17
9-2、ポトス 20
10、五感とタイマー 24
11、オモト 26
12、最後のチャンス 28
13、感覚 29
14、味 31
15、ヒナギク 33

1、カエデ誕生

　その瞬間、わたしは人生を振り返った。

◆◆◆

　わたしが生まれた時、太陽と金星と土星が、牡牛座の４ハウスで重なっていた。
　占い師のユウギリさんが説明してくれた。
「五感を鍛えることが人生の目的。同時に課題でもある。成長に時間がかかるだろう。愛ゆえに迷う」
　父ポトスの同級生であるヘチマさんは驚いたそう。
　両親とも優秀だからだ。娘のカエデも有能だと思い込んでいた。
「つまり、どんくさい？」
　同じく同級生のキウイさんは親しみを感じた。
「俺らと同じ？」
　同時に叫んだ。
「ポトスの代わりに俺らが守る！」
　ユウギリさんに親指をたてて見せると、任せたとばかりにうなずく。

◆◆◆

　子どもが７歳から１２歳まで、山奥の小さな村で小遣いを稼ぐ世界。
　村の運営や起業が花形の厳しい世界で、わたしが願ったささやかな夢の話を聞いてほしい。

2、連想

７歳で金がもらえる。
つまり、好きなものが買える。
絵本に出てくるお菓子も買えるらしい。
誰も目の前では食べない。
しかし、突然家に帰ったら、「嗅いだことない甘い匂いがした」という噂話はよく聞く。
わたしはマドレーヌが食べてみたい。
母に言うと黙ってニコニコしていた。
たぶん、食べられるのだろう。

◆◆◆

１３歳になる子どもは、３月半ばに町の工場へ去る。
代わりに７歳になる子どもが、手伝いに参加する。お金はまだもらえない。
母と同じ給食係を選んだわたしは、調理場に入ることが許される。

◆◆◆

初めての見学なので、母だけでなく、心配してヘチマさんとキウイさんも来ていた。

その日は、昼ごはんの準備のため、母はほうれん草を茹でる支度をしていた。
お椀の底に沈めて、豚汁を注ぐのだ。
大きな鍋に水を張り、薪で沸かす。
母はわたしに見張りを頼んだ。
「鍋の底から小さい泡が出たら呼んでね」
「うん！」
ほうれん草を洗うため、母が水場に行く。

　離れた場所で、ヘチマさんとキウイさんが話している。

　眺めていても、水に変化はない。
　楽しいから鍋は見ているが、何のために見ているのか、忘れてしまう。
　鍋の底に小さな泡が見えた時、年上の子どもたちがお小遣いで買ったシャボン玉のようだと思う。
　ぱちん。
　泡が浮かんで、水面で弾ける。
　シャボン玉が弾けて、せっけん水が目に入ったことを思い出す。
　すごく痛い。泣いた。
　母に水場に連れていかれて、目を洗った。
　せっけんといえば、洗うものだ。
　洗うと言えば、ユウギリさんはいい匂いのするシャンプーをお小遣いで買っているという。
　シャンプーを買うのもいいなぁ。
　でもマドレーヌもいいし。
　ほしいものが次々浮かんでくる。
　もう鍋は全く見てなかった。
「カエデ、鍋！」
「は！」
　グラグラ沸き立ち、もうもうと湯気が上がっている。

　母だけでなく、ヘチマさんとキウイさんも近くに来る。
　ヘチマさんが心配そうに言う。
「やっぱりカエデちゃんに７歳からは無理だ」
　わたしは焦る。マドレーヌが遠ざかる。
「俺らが村と話をつけてきますよ」
　キウイさんが賛成する。
　わたしのマドレーヌ！
「大丈夫。通常、付き添いは一週間だけど、一年しようと思うの。お小遣いは半額になるけど、１年待つよりいいでしょ？」
　いい。すごくいい！
「うん！」
　わたしは母に抱きついた。
　優しい手が、頭をなでてくれた。

◆◆◆

次は、こんな性格のわたしが、見習いでどうなったのか、聞いてほしい。

3、関係ある？

　かまどで飯を炊くことは、総合力が問われる。だから、初めての子どもに必ず任される。
　うまくできれば、将来を期待される。

◆◆◆

　初めての日、２升炊ける大きな羽釜を運ぶことから始まる。
　体が丈夫で、力持ちなので、わたしには楽勝。
　満足そうに母が微笑む。
　母は問いかける。
「米の計り方は知っているね？」
　わたしは自信をもって答える。
「うん！」
　１升枡に米をすくい、山盛りのまま入れようとする。
　母が慌てて止める。
「待って。平ら！」
「あ！」
　やっちゃった。
　気持ちを切り替えて、小さな手ですりきれ１杯にする。
　そしてもう１杯入れる。
「今日は入れ方を覚えたね。あとはわたしがやって見せるからみていて」
　母が羽釜を受け取り、米を磨ぐ。
　水が注がれ、かまどに羽釜が据えられる。
　藁に火がつく。
　いつ見てもワクワクする。母のご飯は美味しい。炊けるのが楽しみ。
「水がぶくぶくになるまでちょっと強めにするの。音が変わるから聞いていて」
　耳に手を当て音を聞く。
　水が怒ってる。ジリジリ言ってる。お尻に火をつけられてるもんね。熱いよね。わたしなら怒っちゃうよ。
「今の音、聞いた？」
「え！？」

　手際よく母が火を落とす。
「全然分からなかった」
「火を使ってる時によそ事考えてちゃだめよ」
　首をかしげる。
「よそ事ってなに？」
「今はご飯を炊いてる。火と水の様子以外のことよ」
　悩む。
「水が怒ってた」
「それは水のことだけど、ご飯を炊くことには関係がないよね？」
「あるような、ないような.....」
「ないよ」
　違いが分からず考え込むカエデ。
　炊いてるところを見ずに、どうして関係がないのか、頭のなかで問い続けている。
　水の話なのに怒っていることは関係なくて、なにが関係あるんだろう。
　ご飯を炊くのに必ず火はつける。そしたらぜったい水が怒る。なのに関係がない？
「カエデ、ちゃんと見てないとだめよ」
　関係あるってどういう意味だろう。
「炊けたわ」
「え、もう？」
　蓋を開けようとするカエデ。
「ダメ！」
　母がわたしの手を押さえる。
「どうして？」
「蒸らさないとだめなの」
　椅子に座った母が手招きする。
　母の膝の上に乗る。
「都会では電気釜で炊くの。不味くはないけど、最高じゃない。かまどで炊くのは大変。でも最高の味になる。わたしのご飯の味を覚えてね」
「うん！」
　母に抱き締められ、希望に燃えている。

◆◆◆

　こんな調子のわたしが、１年付き添われてどうなったか、聞いてほしい。

4、ひとりで挑戦！

　わたしが初めてひとりでご飯を炊く日がきた。
　目覚ましでひとりで起きる。
　母のベッドは空っぽ。早朝に散歩をする習慣なのだ。
　わたしを信じて、いつも通りに母が行動してくれることが嬉しかった。

　給食室の前で、ヘチマさんとキウイさんが、体操をしている。
　わたしを心配して見に来たのだろう。
　気づかいは嬉しいが、もっと信じてほしい。
　ヘチマさんとキウイさんが、同時に声をかけてくる。
「おはよう！」
　わたしは少しでも安心させたくて元気よく返した。
「おはよう！」
　ヘチマさんがズバリ言う。
「今日から一人で炊くんだろ。困ったら俺たちをすぐ呼びな」
　ニッコリする。
「ありがとう。でも大丈夫。１年も習ったもの！」
　キウイさんはただ応援してくれた。
「頑張って！」
　手を振り、建物に飛び込んだ。

　羽釜を机に運ぶ。
　２升の米をちゃんとすりきれで入れる。
　水で米を磨ぐ。
　受けるざるにかなりこぼす。
「あ、やっちゃった！」
　ざるから羽釜に戻す。
「明日は、こぼさないぞ！」
　かまどに羽釜を据える。
　藁に火をつける。
　水が沸く音に耳を傾ける。

だんだん大きくなってきた。もういいかな。まだかな。分かんないや。
わたしは強火のまま炊き続けた。

◆◆◆

村の人たちが給食室でご飯がくるのをまっている。
わたしは羽釜を運んだ。
蓋を開けると米は真っ黒。
１つ年下の科学好きのハガネ少年が叫んだ。
「朝飯ぬきかよ！」
慌ててヘチマさんとキウイさんがハガネの口をふさぐ。
わたしは泣くのを我慢した。

調理場に戻り、焦げた羽釜をひとりで洗う。
後始末は自分でするルール。
「お母さんのように上手になるぞ」
涙をぬぐって顔をあげる。

◆◆◆

その後も失敗は続く。
本音を聞かされたわたしがどうなったか、聞いてほしい。

5、本音

ふー。
今朝も飯炊きに失敗してしまう。
焦がすよりよいと早めに火を落とすと芯が残る。
長く炊いても焦げないように、水を増やすとべちゃべちゃになる。
もうどうしていいか、分からなかった。
気分転換に河原に散歩に出掛ける。

◆◆◆

ヘチマさんとキウイさんが釣りをしている。
わたしはびっくりさせようとそっと近づいた。
すると二人がわたしのことを話していた。
ヘチマさんがため息をつきながら言う。
「ドキドキハラハラのカエデ飯は１０日に１回かぁ.....」
淡々とキウイさんが返す。
「米炊き当番は３０人いるからなぁ」
わたしは逃げ出そうとしてスッ転ぶ。
二人が同時に振り向く。
わたしの頬から涙が落ちる。
ヘチマさんがしまったという顔で言う。
「カエデちゃん！？」
キウイさんが気を使ってくれる。
「悪い意味じゃないんだ」
悪い意味だよ！
人に会っても黙ったまま、家まで駆け抜けた。

◆◆◆

家に着くと甘い匂いがした。
母が隠れて何か食べているのだろ。１２歳までの子どもに与えないのは村のルールなのだ。仕方がない。
半額報酬をもらってるから、買おうとおもえばマドレーヌを買える。でも失敗ばかりなのに買えないよ！
心を落ち着けて、静かに言う。
「入っていい？」
「５分待って！」
わたしは止まらない涙を必死でぬぐった。
びちゃびちゃになる手の感触が、粥になった飯を連想させて、悲しみが爆発した！
「わたし、米炊きやめたい」
言い終わるとおいおい声を上げて泣き出す。
玄関が開き、母が慌てて出てくる。
「どうしたの？」
うっ。うっ。
言葉にならないわたしの背中をさすり、母が家の中に連れ込む。
「河原でヘチマさんとキウイさんが釣りしてて、近づいたら、ドキドキハラハラのカエデ飯って言ってたの！」
母がわたしの頭をなでる。
「失敗しても食べてくれるのに期待に応えないでどうする！」
まさか叱られるとは！
びっくりして言い返す。
「だってわたしが食べても不味いもん。みんな嫌だよね」
ぎゅっと抱き締められる。
「カエデならできる。お母ちゃんが死ぬ前にうまいめしをたべさせておくれ」
わたしは首をかしげる。
「カエデがおばあちゃんになってもいいの？」
「いいよ。長生きして待つから」
うなずき、涙をぬぐ。
「顔を洗ってらっしゃい」
「うん」
流しで顔を洗っているとチャイムが鳴る。
母が玄関をそっと開ける。
「ヘチマとキウイが魚やいて食べようって来てるけどどうする？」
「いく！」
顔をふき、玄関に向かう。
息ぴったりに同時に言う。
「傷つけてごめんな」
「本当のことだからいいの。泣いてごめんね」
ヘチマさんとキウイさんの真ん中に挟まれ、手をつないで歩き出す。

後ろから母もついて来る。

◆◆◆

母が言うのだから、必ず長生きしてくれる。わたしは安心しきっていた。

しかし、生まれた時から見守ってくれてるヘチマさんとキウイさんでさえしんどいまずさなのに、赤の他人が耐えられるわけもない。

どうなったか、聞いてほしい。

6、ハガネ

　季節は真夏になっていた。
　つまり、４ヶ月まずい飯を食べさせ続けている。
　窓の外で咲き誇るヒマワリが憎らしく思えた。
　給食室に羽釜を運び、村人の前で顔を上げるのが恥ずかしいからだ。
　特にハガネの顔を見るのは辛い。毎回あからさまに怒っているから。
　蓋を開けるとご飯がべちゃべちゃ。
　とうとうハガネが言い出した！
「俺、食べない。カエデのごはんはすごくまずい。もう米を炊かないでほしい。代わりに俺が炊く」
　ヘチマさんとキウイさんがハガネの口をふさぐ。
　ヘチマさんが怒る。
「頑張ってるカエデになんてこという」
　つかさずキウイさんが突っ込む。
「お前も泣かせたじゃん！」
　ばつが悪そうに、ヘチマさんが頭をかく。
　指導的な立場にあるユウギリさんが判断を下す。
「成長を信じて見守らないのは悪いことだ。ハガネは村から出ていきなさい」
　わたしはハガネをかばった。
「本当のことだからいいのよ。叱らないで」
　振り返り、ハガネの目を見る。
「わたしには、うまい飯を炊くという夢があるの。やめない。だから教えて」
　ふん。ハガネが鼻を鳴らす。
「教えを請うなら、俺に頭を下げられるのか？」
　わたしは心を込めて深々と頭を下げた。
「よろしくお願いします」
　照れ臭そうに鼻をいじるハガネが答える。
「いいだろう。明日の朝は俺の当番だから来い」
「はい！」
　ユウギリさんが、ヘチマさんとキウイさんを見てうなずく。
　キウイさんが雰囲気を変えようとしてくれる。
「さあ、たべようぜ！」
　ヘチマさんが引き戻す。

「これが最後の失敗かも知れないから、味わおうぜ！」
　キウイさんがヘチマさんの頭をポカンとはたく。
　ヘチマさんがわたしを見る。
　わたしは口に手を当てて笑ってしまう。
　そうなるとよいのだけど。

◆◆◆

　ハガネのやり方にわたしはびっくりする。
　どんな方法か、聞いてほしい。

7、科学の力

翌朝、わたしはいつもより早く調理場に向かった。
せめて、道具は準備しておきたい。
羽釜、枡、米を用意する。
昨日は憎らしく思えたヒマワリが、１本だけ心配そうにうつむいている。
きっとこの子もどんくさいのね。応援してね。
祈りを捧げる。

いつのまにか、ハガネがいる。
「イマドキ祈る！？　宗教は廃れて占いの価値観だけが残ったのに。科学的じゃないな！」
そうだけど.....。
こちらの戸惑いを無視して、ハガネが続ける。
「大事なのは数字！」
わたしはきょとんとする。
「米だけじゃない。水も、藁も、加熱する時間も、全部はかる！」
できそうな方法に、思わず返事をする！
「はい！」
わたしは、タイマーや計りや計量カップを出してくる。
「俺が言う数字をメモれ」
「はい！」
ポケットから端末を取り出し、メモアプリを開く。
感覚に頼らない方法があるなんて！
ハガネを尊敬の眼差しで見つめる。

◆◆◆

科学的なやり方を習った結果的どうなったか、聞いてほしい。

8、再戦

　次の当番が回ってきた。
　ふう。米も水も藁もはかった。加熱時間もタイマーしてる。失敗はないず。
　窓の外を見る。
　灰色の雲が流れていく。
　雨が降るのかしら？
　かまどから離れて窓に近づく。
　窓ガラスに雨つぶが打ち付ける。
　ピカッと光る。
　ゴロゴロ。
「きゃっ」
　タイマーがピピピピとなる。
　羽釜から蒸気が出てる。
「は！」
　急いで火を小さくする。
「ふー。焦げてないよね？」
　またタイマーをセットする。

　◆◆◆

　みんなが待っている給食室に羽釜を運んだ。
　ハガネ、ヘチマさんとキウイさん、ユウギリさん、母、みんないる。
　ふたを開ける。
　つやつや。
　最初にハガネが口を開いた。
「俺の指示がいいからな！」
　わたしは素直に答えた。
「うん。ありがとう！」
　みんな笑顔になる。

◆◆◆

まずくなくなり、ほっとする。
そして１３歳から１５歳まで工場勤めの義務を果たすことになる。
卒寮してどうなったか、聞いてほしい。

9-1、卒寮

わたしは、調理場で初めてほぼ空になった羽釜を眺めていた。
残りご飯をタッパーに詰める。
しゃもじに残ったご飯を口に入れる。
美味しい。でもお母さんの味じゃない。何がちがうんだろう。
首をかしげた。

成功させる方法がわかって、新たな悩みが生まれる。
母と同じ味が出したいが、はかることをやめれば失敗するかもしれない。
ユウギリさんの言った通り、わたしは愛ゆえに悩んだ。
みんなを悲しませたくないから。
いつか、母の味が出せたら、マドレーヌを食べよう。
そう決意して、お小遣いを手に入れても、マドレーヌだけは食べなかった。

◆◆◆

迷ってる間に１３歳になる。
町の寮に引っ越して、工場に勤めることになる。
木造のアパートは、２０室くらいある。給食室で、初めて電気釜のご飯を食べた。
これが電気釜のご飯。香りも弱いし、甘味も少ない。不味くはないけど.....。
周りを見る。
みんなびっくりしてる。
かまどのご飯しかたべたことないもんね。分かるよ。わたしも同じ気持ちだよ！
初めて唐揚げを食べる。
美味しくて微笑む。
米はいまいちだけど、おかずは美味しいかも！
街には、もっとすごいものがあるんだろうなー。

◆◆◆

工場では、最初はみんなラインについて作業する。
わたしの役割は、ランプのついた機械から、商品を回収すること。
もう必死。
次々ランプがつきパニック。
たまりすぎて警報が鳴る。

◆◆◆

泣きそうな毎日に３年耐えられたのは、父から焼き菓子が送られてきたからだ。
楽しみにしていたマドレーヌも入っていた。
わたしは、決意が揺らいだ。
悩んでハガネに端末で連絡する。
「やるから食うでいいんじゃね？」
たった一文だけ返る。
やればいいのだから、食べてもいい。
次の瞬間、かぶりついてた。
ふんわり、しっとり、なんとも言えない味がする。
これが６年待った味。うまいよー。もっと早く食べればよかった！
きっと母も食べていたのだろう。
それから父は毎月送ってくれた。

◆◆◆

たいていは３ヶ月でラインを離れて、違う仕事に就く。
わたしはやっと覚えたラインを離れなかった。３年やりきった。
最後まで警報ランプを鳴らしていたけど.....。

卒寮を控えて、事務員さんの面接を受けた。
「もうすぐ卒寮だけど、進路は？」
「村に帰ろうと思います」
当たり前とばかりに事務員さんが問いかける。
「チャレンジもせずに？」
「わたしみたいなどんくさいやつに無理です」
資料を見る事務員さん。

「お父さんは有名な貿易商でしょ。会わなくていいの？」
「……焼き菓子のお礼が言いたいかも……」
　ここぞとばかりに事務員さんが強調する。
「忙しい方だからお盆にも帰れない。３９歳を過ぎてるから村に戻ることもない。会うなら今しかない」
　うつむき、答える。
「……はい」
　説得されてしまう。

◆◆◆

　会いに行ったら帰ろう。会うだけ。嫌なことは起こらない。
　自分を励まして、父に会ったわたしがどうなったか、聞いてほしい。

9-2、ポトス

街は、高く高く伸びて、迷路を歩いているようだった。
一際目立つ、ガラス張りのビルが、父が所有する会社らしい。
受付の人に案内されて、会議室に入る。
父らしき男性が、サンドイッチを食べている。
「来たか！」
写真で見るより大きくて、びっくりする。
父が立ち上がって手を差し出す。
おずおずと握る。
ごつさにちょっとビビる。
「明日から３ヶ月出張だ」
「お忙しいのに、いつも焼き菓子をありがとうございます」
うんうんと父がうなずく。
「カエデはなんの商売を始めるんだ？」
びっくりする。言葉がでない。
「まずは自力で３ヶ月頑張ってみなさい。結果で判断するから」
うつむくしかない。
「.....はい」
逃げるように応接室を出た。

◆◆◆

卒寮すると 30 万もらえる。
わたしは１日 2500 円で光熱費も日払いのボロいアパートを借りた。
商売の仕方など分からない。
端末で求人を探す。

最初にラーメン屋で店員になる。
わたしはどんぶりを落とした。
ガチャンとすごい音が響く。

　店主がとうとう怒鳴る。
「ばかやろう。１時間で 10 回目だ。クビ！」
　ぺこぺこと頭を下げる。
「すいませんでした！」
　泣きながら去る。

　次の日、内職の工場で働いた。
　机にむかって、プラスチックの小物にヤスリをかける仕事だ。
　わたしは真剣に取り組む。
　完成品を監督に見せる。
　ぶちきれそう。
「不良品ばかり。無駄にした分、金を払え！」
「すいませんでした」
　床につくほど頭を下げる。

　アパートに戻ると端末のお金が 65 円。
　昨日まで 25 万はあったのに、そんなに損害をだしたの？
「明日の家賃もない。出なくちゃ。でも村にも帰れない。どうしたら.....」
　端末の充電が切れて真っ暗になる。
　思わず泣き出す。

　アパートを引き払って、近所の公園に来た。
　夜の公園には誰もいない。
　端末は使えない。誰にも助けを求められない。どうしよう。
　このまま死ぬのかな。
　４月の夜は、まだ寒い。ベンチに丸くなり、疲れはてて眠る。

　目を覚ますと足元に人が座っている。
　父だ。
「起きたか」
　体を起こしてうなずく。
　なんといえばいいのだろう？
　３日もたなかったなんて.....。
「すまなかったな。本当は村に帰るつもりだったのに、無理矢理挑戦させて」
　端末を差し出す父。
　充電されてる。

通知音が鳴る。
「10 万送金した。交通費だ。駅まで送る。帰りなさい」
村に帰れるんだ。
もう戦わなくていいんだ。
「情けない娘でごめんなさい」
涙と鼻水でぐちゃくちゃな顔をぬぐう。
ティッシュを父が差し出す。
「レベルにあったことを頑張りなさい。うまい飯を母さんにたべさせるんだろ？」
「はい！」
鼻をかむ。

村に帰ると母が泣きながら迎えてくれた。
母の涙を見たのは、その時が初めてだった。
ヘチマさんとキウイさんに、後から事情を聞いた。
父はわたしに探偵をつけていたそう。
内職の賠償責任はなかったらしい。
金を取り戻す相談を、父と探偵がしている間に、わたしが行方不明になり、母に連絡が来る。
街に探しに行くと聞かない母をなだめ、父が初めて仕事を中断したんだそう。そして、探偵と一緒に探してくれたらしい。
たまたま近くの公園にいたからすぐに見つかって、何事もなく済んだ。
もし繁華街まで行っていたら、売られていたかもしれない。
行動力がなくて助かることもあるのね。

◆◆◆

わたしが村に帰ってから、２度目の夏が来た。
窓から入道雲が見える。
玄関チャイムが鳴る。
扉を開ける。
ハガネが立っている。卒寮して街で働いているという。わたしと違ってすごいな。
「お盆だから帰ってきたの？」
後ろから紙袋を出す。
「これ、やるよ」
中を覗くと焼菓子と書いてある。
「嬉しいけど、どうして？」
ハガネが辺りをうかがい、玄関に入ってきて扉を締める。

　緊張する。
「村のために戦うなら、守る人数は多い方がいい。俺の子どもを産んでくれ」
「いきなり子ども？」
　うんうんとうなずくハガネ。
「今すぐでなくてもいい。カエデがよいと思ったらでいい。ダメか？」
　無言で焼き菓子の包みを開ける。
　マドレーヌを一口食べる。
「こんなに美味しいものくれるならいいかな」
「よし！」
　ガッツポーズするハガネ。
　お父さんもちがう店の焼菓子送ってくれる。倍も食べられるなんて幸せ。
　それにハガネのことはちょっとだけ好きだから、プロポーズされて嬉しい。

◆◆◆

　どこで生きるか。
　誰の子どもを産むか。
　人生が決まったわたしは、母との約束を果たすため、修行に生きた。
　どんな日々だったのか、聞いてほしい。

10、五感とタイマー

二十歳になったわたしは、相変わらず、調理場で飯を炊く。
連想癖はだいぶなおり、真剣に火の様子を見ていた。
タイマーがなる。
羽釜の湯気の具合を確認する。
違いが分かる気もするけど、失敗したら村の人に迷惑がかかる.....。
母はまだ元気なのだから、今日でなくてもいい。
やらないことが、母が元気な証にさえ思えてくる。

ちっちっちっちっ。
ざっざっざっざっ。
ぶくぶくぶくぶく。
「あ！」
今、音が変わった気がする。

ちっちっちっちっ。
ざっざっざっざっ。
ぶくぶくぶくぶく。
「は！」
今と思ったときタイマーが鳴った。

でも。
だけど。

迷いの中、ハガネとの子どもをおんぶして、ひたすら飯を炊く。
赤ん坊はどんどん大きくなる。
違う赤ん坊に変わる。
２人目も大きくなる。
２人目が背中から消えて、3 人目の赤ん坊が背負われている。

子どもはどんどん大きくなるのに、わたしだけが変われない。

◆◆◆

気がつくと試せないまま５０歳になっていた。
そして、そのときは来た。

11、オモト

　５０歳の春を迎える。
　母たちのために山の斜面で山菜を摘む。
　突然、遠くからヘチマさんの声がする。
「カエデさん、すぐ帰って！」
　立ち上がるカエデ。
　山菜が散らばる。
「どうしたの？」
　息を切らせてヘチマさんが来る。
「はあ、はあ。オモトさんが。はあ、はあ。倒れた」
　迷わず走り出す。

　母はヘリコプターで運ばれるところだった。
　町でしかできない手術が必要らしい。
　ヘリに乗り込み、母の手を取る。
「死なないで、まだうまい飯を食べさせてない！」
　弱々しい手を母が伸ばす。
「普通でいいのよ。普通で十分」
　ヘリの扉が閉まる。
　取り残されたわたしは、呆然とする。

　夜になり、亡くなったと端末に知らせが来た。
　テーブルにうつ伏せ、泣きじゃくった。

◆◆◆

　最期に話せたのが奇跡だったという。
　あんなに信じて期待してくれたのに、普通でいいの？
　もう頑張らなくてていいの？

わたしはなんのために４０年以上も米を炊いてきたの？
すべてを失ったわたしにチャンスが与えられた話を聞いてほしい。

12、最後のチャンス

わたしは米が炊けなくなってしまった。
自宅に引きこもり、泣き続けた。
村人たちは、黙って見守ってくれた。

母の初盆の朝、玄関チャイムが激しく鳴る。
扉を開けるとヘチマさんとキウイさんが立ってる。
ヘチマさんが怒ったように言う。
「もう夏だぞ。お盆だ」
畳み掛けるようにキウイさんが怒鳴る。
「カエデさんが炊かないなら今年は飯抜きだ。本気だぞ！」
わたしは激しく首を横に振り、泣き出した。
真剣な眼差しでヘチマさんが訴える。
「オモトさんの初盆に、うまい飯を食わせてやりなよ」
うんうんとうなずき、キウイさんが賛同する。
「カエデさんならできるよ。迷惑とか考えるな！」
わたしは二人を交互に見た。
「本当にできると思う？」
パシッ。ヘチマさんがわたしの肩を叩く。
「４０年以上炊いてるんだ。できるさ」
パシッ。キウイさんも真似をする。
「自分を信じて！」
うなずき、涙をぬぐう。

◆◆◆

わたしが挑戦できたのか、聞いてほしい。

13、感覚

４ヶ月ぶりに調理場に入る。
机の上に計量器が並んでいる。
枡で２升図る。
水を計ろうとして、やめる。
感覚を頼りに注ぐ。
手触りで藁の量を決める。
かまどに火をつける。
羽釜の音に耳をすませる。
「変わった！」
火を落とす。
蒸らすのを待つ間、手を合わせて祈りを捧げる。
ふたを開ける。
つやつやでおいしそう。
見た目は大丈夫。問題は味。
式が終わるまで口にできない。
顔をおおって、肩をひくつかせて、泣くのを我慢してる。

◆◆◆

共同墓地には、石の祠がある。
手前に茶碗に山盛りのご飯と味噌汁が備えられてる。
村人が集まって手を合わせている。
音楽が始まる。
葬儀歌手のリードでみんな歌う。
「WOW WOW WOW」
フレーズにあわせて、思い出がよみがえる。
うまいごはんを食べさせたかったよ。
見上げると雲ひとつない青空。
母の笑顔を思い出す。

◆◆◆

挑戦はできたけど、味はどうなったのか、聞いてほしい。

14、味

　葬儀を終えて、村人が給食室に集まる。
　ヘチマさんとキウイさんに、ハガネもいる。
　わたしはそっと涙をぬぐう。
　ヘチマさんが食べる。
　驚く。
　キウイさんも食べる。
　驚く。
　手を取り合って喜んでる。
　わたしの方に駆け寄る二人。
　相変わらず同時に言う。
「食べてみな」
　わたしはためらう。
　まずかったら？
「でも」
　背中をパンパン叩いてくる。
　一口食べる。
「お母さんの味だ」
　喜びの涙が流れる。
　ハガネが食べる。
「うまい！」
　カエデがにっこり笑う。
　ヘチマさんが突っ込む。
「おまえ、まずいけなしたくせに」
　すぐに忘れるハガネは、きょとんとする。
「そうだっけ。おぼえてない」
　懐かしくて、わたしは思わず笑い出す。

◆◆◆

　それから１０年、わたしは母の味を炊いた。

そして３月半ばに引退する。
４月になり、どんな隠居生活が待っていたのか、聞いてほしい。

15、ヒナギク

４月のある日、飯が炊けるのを待つ間、わたしを労ってくれる。
ヘチマさんがいつも通り先に口を開く。
「カエデさん、お疲れさま」
キウイさんが嬉しいことをいってくれる。
「１０年もうまい飯を食わせてくれてありがとう」
わたしはニコニコ聞いている。
そしてやっぱり昔の話が始まる。ヘチマさんが、蒸し返す。
「ハラハラどきどきのカエデ飯が懐かしいよ」
そこへ、初めて一人で炊いた７歳の少女ヒナギクが、羽釜を運んでくる。
一口食べる。
芯がある。
顔を見合わせる。
みんな懐かしい。

その瞬間、わたしは自分の人生を振り返った。
この子は何年で炊けるかな？
みんな楽しそうにご飯を食べる。

◆◆◆

母もきっとこんな気持ちだったんだろう。
期待してくれたことも、普通でいいと言い残したことも、すべて分かる気がした。
わたしの夢の話はおしまい。
聞いてくれてありがとう！

かまどのめし初稿20240331

著　　ELYE

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社